

# 三燕地域出土馬具について—鞍金具と轡を中心に

花谷 浩

## I はじめに

なぜか足跡を記せず、調査のチャンスが巡ってこなかった中国だったが、ようやく2005年3月に遼寧省瀋陽の大地を踏むことができた。その後、同年6・7月にも同地を訪ね、遼寧省文物考古研究所の配慮により、同研究所および朝陽市博物館で多くの馬具を観察・実測することができた。

近年、遼寧省では慕容鮮卑墓や三燕の墓が多数発見・発掘調査され、数多くの馬具がみつかった。これが、周辺地域の馬具研究にもたらした影響はきわめて大きいものがある<sup>1</sup>。しかしながら、それらの馬具類はほとんどが簡略な報告しかなされておらず、細部の状況などは不明であった。本稿は、実際に観察した馬具資料について、筆者の力量のおよぶ範囲で詳細を記述することを目的とした。

## II 三燕の鞍金具と轡—個別資料の観察

### A 鞍金具

#### 1. 喇嘛洞 II M101号墓出土金銅製鞍金具(図版9-1、10-5)

外形が楕円形をした鞍金具である<sup>2</sup>。鞍金具は、海金具と磯金具および鞍橋外周の覆輪から構成される。海金具は三日月形をしており、爪先が大きく内湾する。しおで(鞍)金具は確認されていない。

**前輪の鞍金具** 前輪の海金具は、左右幅47.8cm、高さ24.2cm、覆輪の幅は0.95cm、各部品の金銅板は厚さ0.4~0.5mmの薄さである。左に5単位、右に5単位半の龍紋を透彫と蹴彫で表現する<sup>3</sup>。龍紋は、体躯の四肢や羽根・鱗、頭部の角や顎髭などが蹴彫で表現されているが、一部で唐草紋化して図像に乱れのみられるところもある。海金具の紋様は、反転して向き合う一対の龍紋が中央にあり、その右に5単位が、左向き・右向き・左向き・左向き・左向きに配置される。右端の龍紋は、体躯の半分が表現されない。左は、これを反転させた向きの龍紋が並ぶが、4単位しかなく、爪先部は唐草状の紋様で充填される。

海金具の中央部下辺(洲浜部)は左右幅9.5cmで1.5cm突出し、ここに釘を3本打ち込んでいるが、すべて脱落して残らない。突出部の右隅に、釘孔穿孔以前に書かれた、ケガキ文字が

ある。海金具の爪先は尖らず、1.5cmほどの幅をもった矩形となる。

なお、右側の爪先は切断後に鑢仕上げされてきれいな直線となっているが、左側は不整な破断面を残しており、もとはさらに長かったものを折り取ったようにみえる。

海金具の内縁には、径2～3mmの円孔が、左に3個、右に4個あいている。突出部下辺の釘孔にくらべるとかなり小さいので、それらよりは細い釘が打ち込んであったものと推測される<sup>4</sup>。

海金具の外周に沿って、縁金具(幅1.1cm)がめぐる。縁金具には1～1.3cm間隔で、総数68本(22本脱落)の銅釘が打ち込まれる。

銅釘は、頭部が半球形をした、全長1.5～2cmの笠釘である。頭部は径0.8～0.9cmあり、鍍金されている。軸部は断面四角形で、全長1.4～1.8cm、根本の一辺2.5mmあって先端に向かって細くなる。海金具の右の爪先には、縁金具が及んでいない釘孔が1個あるが、鏽の様子から判断すると、銅釘は打ってあったらしい。

海金具・縁金具とも、釘孔はあらかじめ穿孔してあり、孔の周囲は鑢で整形されている。しかし、裏面を観察すると、実際の取付には苦勞した痕跡がある。鞍橋の木部に隠れて観察できない部分もあるが、海金具の左側では、縁金具の釘孔と海金具の釘孔とが正確に一致するのに対して、右側では、海金具の釘孔が爪先側にずれてしまったために、釘が孔を貫通していない。また、右の爪先には縁金具が重ならず、結果として釘が貫通しなかった釘孔が1個ある。このような状況は、磯金具でも認められた。

鞍橋の外周には、幅0.95～0.97cmの覆輪がめぐっていて、これにおよそ70本<sup>5</sup>の釘を打ち込んで固定する。覆輪と海金具とはほぼ直角の角度を保っている。釘の規格は、海金具覆輪のそれとほとんど同じである。

前輪磯金具は、下辺が長い変形の扇形をしている。上辺は海金具の内縁とカーブが一致し、海金具下辺中央の突出部と爪先との間におさまる大きさである。組み合わせると、洲浜に向かう内側の辺はほぼ垂直になる。金具にはふくらみがなく、まったくの板状である。左の磯金具は左右15cm、高さ15.9cm、下辺と上辺との最大距離9.8cm、右の磯金具は左右15.2cm、高さ15.8cm、下辺と上辺との最大距離9.8cm。

前輪の磯金具には、中央やや上にしおでを通す長方形の孔があいている。その外側に接して、頭部を内側に向け体軀を上方に捻転させるやや大型の龍紋が表現される。しおで孔の内側(中央寄り)には、頭部を反転させ外側に向けた龍紋があり、その下方にも、体軀だけを表現したような唐草紋化した龍紋が表現される。さらに、爪先部分に上半身だけの龍紋がみえる。

磯金具は、下辺を除く2辺に縁金具があてられ、そこに銅釘(頭部のみ鍍金)が打ち込まれている。縁金具は2辺が一体となった鉤形のもので、両端は一部を欠損する。釘は左右とも、磯金具内側に5本、上辺に21本、合計26本を数える。あらかじめ、磯金具と縁金具に釘孔を

穿ち、両者を通して釘を並べているが、磯金具の内側の下端には、縁金具が及ばず、結果として釘が打たれなかった釘孔がある。また、上辺から爪先に向かう部分では、縁金具と磯金具の釘孔の間隔が一致しなかったため、磯金具にあらかじめ穿たれていた釘孔を無視して釘が打ち込まれている。このため、磯金具左隅には2個一対にみえる釘孔が並ぶことになる。当初の穿孔は、孔の周囲が丁寧に鑢仕上げされているのに対し、後からの穿孔は孔の周囲が裏面側にめくれ上がっていて、仕上げがなされていない。

前輪磯金具の銅釘は、観察時点で左右とも4本ずつが頭部を残していた<sup>6</sup>。ただし、それらの銅釘は、すべて鞍の木部(居木の小口)に打ち込まれたものではない。右の磯金具内側に残る2本のうち上に位置する釘と、左の磯金具の内側に残る2本の釘は、軸部の先端が叩き潰してあり、木部に打ち込まれていなかったことが明瞭である。さらに、左右とも磯金具上辺に残る2本ずつの釘は、先端を叩き潰したり、短く切って折り曲げてあったりする。同様の状況を、後輪にも認めた。

**後輪の鞍金具** 後輪も、海金具と左右の磯金具がある。作りは前輪の金具と同じだが、形や紋様にわずかな違いがある。

海金具は、左右53.2cm、高さ22.8cmあり、洲浜部に左右幅13.7cmの突出部がある。そこには前輪と同じく、頭部を鍍金した銅釘3本が打ち込まれる。釘の頭部径は、他のものよりわずかに小さい(径0.8cm)。

後輪の海金具は前輪の海金具より左右が長いため、龍紋がわずかに左右に長く表現され、また、左爪先には頭部のない不完全な体躯が配置されている。海金具周縁に縁金具をのせて釘を繁打ちすることや、縁金具とほぼ同じ幅の覆輪を鞍橋の外周に取り付けることは、前輪と同様である。縁金具の釘は71本(12本脱落)を数える。銅釘の長さは18mm前後である。

磯金具が重なる海金具下辺(内周)には、左右5個ずつ小さな孔が並んでいる。前輪と同じく、海金具を鞍橋に固定する釘孔とみてよい。孔は表から穿孔され、裏面では銅板がめくれあがっている。釘そのものは1本も残らない。

後輪海金具の内面には、厚さ約1cmある鞍橋の木部が良好な状態で残る。海金具の輪郭にそうように、木目が走っている。柁目材か板目材かは判別できなかった。また、中央部分では、内外とで2層に分かれているようにもみえるが、爪先に近いほかの場所でもそのようにみえるところもあって、鞍橋が後述する朝陽十二台郷磚廠88M1号墓出土鞍金具のように左右2枚合わせの構造と断定するにはいたらなかった。鞍橋の木質は、海金具の下辺からはみ出して残っている。右の爪先あたりに、ごく一部だが鞍橋の内側の端面を認めた。端面は、海金具の内周からさらに1cmほど内側にあり、そこには5mm角ほどの四角い孔があいている。

次に後輪の磯金具をとりあげよう。磯金具は、左右15.6cm、高さ15.8cm、下辺と上辺との最大距離9.6cmをはかり、左右ともほぼ同じ大きさ、前輪ともほぼ同じ規格である。しお

での孔は、下辺に接してあけてあり、前輪とは位置が異なる。そのため、透彫龍紋の図像は、配置などが違っている。前輪にあった体軀をC字形に大きくくねらせた図像がなく、海金具の紋様と似た意匠(一つは内向きで、もう一つがそれに向かって頸をひねる)が左右ともに2単位大きく表現される。そして、しおで孔の左右には半身の龍紋が充填されている。右の磯金具は、しおでの孔の直下に、そして左は爪先近くに、前輪のものと同じ文字が刻んである。

前輪と違って後輪の磯金具では、縁金具に打った銅釘(頭部表面のみ鍍金)がかなりよく残っていて、その詳細が判明する。磯金具の内側にあてた縁金具の釘は、抜けた左の1本をのぞけば、残っている釘はすべて短く切断され、裏で叩き潰されている。つまり、釘としてではなく「鋌」として機能している。

上辺ではどうか。右の磯金具では、裏側で叩き潰されているものが2本あり、3本は長い軸部を残す。最も長い釘は、頭部を含めて全長20.2mmある。左の磯金具にはさらに多数の銅釘が残り、切り縮められて先を叩き潰されたもの4本、切断されず木部に打ち込まれたもの7本を数える。最も長い釘は全長21.4mmである。上辺中央では、叩き潰されたもの2本が並ぶ箇所もあるが、叩き潰された釘の左右は長い軸部を残す箇所もあり、2～3本おきに軸部が短く叩き潰された釘(「鋌」)が配列されていたようにみえる。

左の磯金具の裏面には、金具に接して皮革質が残存している。木質が付着する部分もあり、よくみると金具と木質部との間に皮革質が挟み込まれていることがわかる。磯金具の縁金具上に並んだ銅釘には、前輪でも観察できたように、革留めと鞍木部への固定、という2つの機能が付与されていたと考える。つまり、まず金具裏面に革を「鋌留技法」で固定しておき、それごと鞍の木部に打ち付けたのだ。

これに対して海金具の内面には、皮革質の痕跡を認めなかった。また、磯金具のそのように、軸部を切断し先端を叩き潰した釘は1本もなかった。したがって、覆輪に並ぶ銅釘と海金具の銅釘は、すべて鞍橋に打ち込んであったと判断してよからう。

鞍の木部に関わることとして、後輪海金具裏面にかなり良好な状態で残っていた鞍橋についての観察結果を補足しておく。鞍橋内周の端面に近くで確認した四角い孔は、居木との結合用紐孔である。そして、端面と残存する木質部から復元できる鞍橋内側のラインは、海金具中央にある突出部の下辺とそろうようにもみえる。おそらく、鞍橋は海金具の平面形とは多少違って、中央に突出部をもたない三日月形の平面形をしており、洲浜部は海金具の突出部が覆うが、その左右は幅1cmほど鞍橋が露出していたのであろう。この狭い部分に磯金具の外周が重複する。とすると、磯金具は居木の小口ではなく、鞍橋の内周に固定されていたことになる。残念ながらこの部分で木質が残存する部位はわずかしがなく、銅釘が打ち込まれていた痕跡を確認できなかった。

次に、磯金具裏面に残存していた皮革質についても少しく思考を記しておく。磯金具が鞍橋の内周部に固定されていたとすると、その固定以前に鞍橋と居木とは緊縛されている必要

がある。鞍を組み立ててから金具を取り付けるのが普通の方法と思う。ならば、磯金具裏面に当てられた皮革は、磯金具の大きさに限られる小さなものと考えるか、あるいは磯金具が覆う居木の小口から居木の下方へと続いていたか、どちらかであろう。後者であれば、皮革は居木の底面を覆っており、前後の磯金具は左右1枚ずつの皮革の両端を固定していた、と推測することも不可能ではない。

## 2. 喇嘛洞ⅡM266号墓出土鉄地金張鞍金具(図版10-3)

ⅡM266号墓は、喇嘛洞墓地Ⅱ区の大型墓である。鞍金具は、前輪と後輪が出土し、うち復元されたのは一部だけである<sup>7</sup>。『三燕文物精粹』では「2点一組で、(中略)1点は修復した」とあり、同書94頁に海金具と磯金具を組み合わせた写真が掲載されている。そして、略報および『三燕文物精粹』ともに、透彫のある鉄製鞍金具と報告している。

しかし、修復された鞍金具を観察した結果、海金具と左の磯金具は同一個体で前輪金具であるが、右の磯金具は別の鞍金具の一部と判断するほうがよいと考えるに至った。

さらに、鉄製ではなく鉄地金張り(金箔張り)の鞍金具と判明した。錆化が著しく、また、X線透過撮影をおこなっていないため、金張りがどこまであったか確定的でないが、少なくとも海金具と磯金具、そして釘の頭部には金箔を認めた。さらに、金箔表面と一部の鉄地板表面に毛彫と蹴彫を確認できたので、喇嘛洞ⅡM101号墓の金銅製鞍金具のような紋様があったとみてよい。この点は後述する。

海金具は、C字形に湾曲した楕円形の平面形で、金具中央が幅9cmで0.8cmほど突出している。海金具は、現状で左右幅45.5cm、高さ26.5cm、最大幅5.8cmある。海金具は現状で左半が右半より強く湾曲するが、これは復元の際の歪みと認めてよいだろうから、喇嘛洞ⅡM101号墓の金銅製前輪海金具の寸法(47.8cm)とほぼ同一の規格だった可能性が高い。爪先は、尖るのでなく、2cmほどの幅をもつ矩形で終わっている。これもⅡM101号墓例と共通する。

これまでも報告されているように、ⅡM101号墓の鞍金具には、全体に透彫で紋様を表現してある、だが、錆や錆化した布帛に覆われていたため、それがどんな紋様であったかはしめされなかった。今回も十分には判別できなかったが、それでも、海金具中央の突出部の右側あたりに幅5～7mmでS字形に屈曲する紋様を認めることができた。喇嘛洞ⅡM101号墓の金銅製鞍金具を参考にすると、それは龍紋の体軀部分に該当する。したがって、透彫の紋様は龍紋と判断してよい。紋様部分の各所で、錆の下に金箔がのぞき、その金箔や金箔が剥落した鉄地板には蹴彫や毛彫を確認できた。

海金具の周囲には、頂部がやや丸みを帯びた四角錐形頭部の鉄釘が打ち込まれている。海金具を鞍橋に固定するための釘である。頭部は一辺8mm前後の大きさ、釘の全長は長く残存しているもので1.5cmあるが、欠損があるので、もとは2cmくらいはあったのだろう。海

金具の外周に縁金具は置かれていない。鉄錆でまったくみえない箇所も多いが、復元すると釘の総数は74か75本。釘の打ち込み方を観察すると、四角い頭部の各辺は海金具外周とはほとんど平行していない。多少の例外はあるが、四角い釘頭部の対角線が、海金具の外周と直交するように打ち込まれたのであろう。この方式は、同型式の鉄釘が繁打ちされた海金具の周囲、鞍橋木部の外周に装着された覆輪にも認めることができる。鉄錆におおわれ、左側で金具が欠落していて、釘の総数は判明しないが、80本に近い数があったと思う。

木製鞍橋に海金具を固定するに、外周に打ち込まれた鉄釘はそれで十分ではあったろうが、それに加えて海金具の内周にも釘留めの痕跡がある。右半については肉眼ではまったく不明だが、左半で2本の釘留めの痕跡を認めた。おそらくは2本だけでなく、4本なり5本が打ち込まれていたのであろう。この固定方法も金銅製の喇嘛洞ⅡM101号墓の鞍金具に共通する。

海金具外周の鉄釘では確認できなかったが、突出部左端の釘頭部は銀張りである。遊離した海金具片(おそらく後輪の一部)に残る鉄釘の中に、頭部を金箔で覆ったものがあるのを確認した。金箔には列点紋がある。

海金具の裏面、鉄釘が打ち込まれた外周部分には、鞍橋の木部が残存している。木部が消失した大半の部分では、海金具の裏に、織り目のきわめて細かい布が錆着して残っている。布は2枚重ねである。鞍橋の表面に貼ってあったのであろう。なお、海金具の表面にも錆着いた布の痕跡はあるが、表面に貼ったものではない。

次に、磯金具について述べる。復元された磯金具は、左右2点あるが、初めにも述べたように、左の磯金具が前輪のものである。右のものは海金具中央の突出部が錆着するので、後輪のものと推定した。

左の磯金具は、内側部分を欠損するが、左右にやや長い扇形の平面形であろう。金具にふくらみはなく、平板である。海金具同様、透彫の紋様があるが、錆のため紋様の詳細は不明である。金箔がのぞいている箇所があり、金張りは確認できる。長さ7cmほど磯金具の下辺を残す破片があるが、それにしおでの孔がみあたらない。ⅡM101号墓例のように、中央やや上方にあくのであろう。磯金具外周の上辺には、頭部四角錐形の鉄釘が密に打たれているが、そのほとんどは軸部を欠損していて、すべてが木部に打ち込まれたのかどうか判別できなかった。爪先部分では、海金具と磯金具が錆で接合する。両者は縁で上下に重なることはなく、同一平面で接している。

右の磯金具とされたものは、前輪海金具と接合しないばかりか、同じ一組の鞍金具かどうかをまず検討する必要がある。この磯金具は、透彫紋様をもった鉄地金張り製品という点では、先述した磯金具と共通するが、相違点も多い。

第一に、打ち込まれた釘は、頭部を鍍金された銅釘で、鉄釘ではない。また、頭部はよく似た四角錐形だが、一辺6～7mmで一回り小さい。

第二に、金具の左上に錆着いた海金具中央の突出部が、高さ3cmほどあって、先述した

前輪海金具よりかなり大きい。ここに打たれた釘も頭部鍍金の銅釘である。磯金具内側に打たれた釘のうち下のほうの3本、上辺に打たれた4本(内側から11~14本目)については、裏側でL字形に折り曲げられたことがわかる。また、上辺の内側から2本目は根本に木質が付着する。

第三に、磯金具の形状がある。左の磯金具は、内側を欠損しているが、金銅製のII M101号墓例と同じように、左右に長い扇形の平面形と推測する。これに対して、左の磯金具は、内側が海金具の突出部に約5cmほどくい込んだ形になり、金具の内側の隅に矩形の切り欠き部分がある形となる。

以上の違いは、左と右の磯金具を別個の鞍金具と判断させるに十分な根拠である。しおで孔の存否およびその位置がわからないので、この磯金具が前輪なのか後輪なのかを判別できなかった。

喇嘛洞II M266号墓の馬具類は、その全貌が判明していないので、今後のさらなる検討を期待したい。

### 3. 喇嘛洞II M202号墓出土鉄製鞍金具(図版10-1・2)

磯金具をともなわない型式で、鉄製の海金具が前後両輪の2点ある<sup>8</sup>。

前輪・後輪とも海金具は、やや角張った鋸形の平面形をし、爪先で左右幅が狭くなる。海金具の内周中央には、方形の突出部を設けない。

前輪は、左右幅40.8cm、復元全高23.8cm。海金具は中央部で上下7cm、爪先部で左右2cmある。右の爪先が欠損せずに残っており、端部は外傾して覆輪端部と揃う。海金具は厚さ2mm前後ある鉄板で、わずかにふくらみがある。内周に沿って、中央と左右4本ずつ、合計9本(左端の1本欠損)の円頭釘(頭部径5mm)が打ち込まれている。覆輪は断面が丸みを帯びた二等辺三角形の断面をした鉄製金具で、前後幅1.9cm、高さ1.2cm。海金具外周で鞍橋に嵌め込み、両端に頭部径5~6mmの円頭釘を打って固定してある。

後輪は前輪よりやや大きく、左右幅51.4cm、復元全高26.8cmある。海金具は中央で上下6cmほどで、金具の上下幅は前輪とほぼ同じである。中央と左右1箇所ずつの計3箇所に2個一対の鉄製コ字形留金具を打ち付ける。留金具は左右幅2cmあり、海金具から5mmほどとび出す。金具は最大で長さ1.6cmが残存し、鞍橋には少なくとも1cmは打ち込んであった。何かの飾り、あるいは小さな旗などを差し込む装置であろうか。金具内面にはそれを推測させる顕著な痕跡はなかった。海金具内周には、前輪と同じく9本の円頭鉄釘が打ち込まれているが、今みえるのは6本である。覆輪は前輪よりやや高さが大きい(1.8cm)が、断面の形状はほぼ同じ。左右2本を中央でつきあわせ、両端を釘留めする。

前輪・後輪とも金具の内面には、鞍橋の木質が錆着して残っており、その木理痕跡は鞍金具の外周に沿って湾曲する。覆輪内面の形からすれば、鞍橋の外周は丸みがあったのである

う。海金具と覆輪との重なり具合からみると、鞍橋にはまず海金具を固定し、次に覆輪をはめ込んだとみてよい。

#### 4. 朝陽十二台郷磚廠88M1号墓出土金銅製鞍金具(図版1、8-2、9-2)

十二台郷磚廠88M1号墓からは、2組の鞍金具が出土している<sup>9</sup>。金銅製透彫鞍金具(木芯銅鑲金鏤空包片鞍橋と銅鑲金鏤空翼形片、仮に「鞍A」とする)と金銅製素紋鞍金具(木芯銅鑲金包片鞍橋と銅鑲金翼形片、仮に「鞍B」とする)である。

**金銅製透彫鞍金具(鞍A)** 鞍金具は、前輪・後輪とも、海金具、左右2枚の磯金具、そして断面U字形の覆輪から構成され、海金具と磯金具には透彫の紋様がある。海金具と磯金具はやや厚手の銅板を切削して透彫紋様と毛彫、列点紋を飾り、鍍金したものである。また、海金具の内面には前後とも鞍橋木部がほぼそのまま残っていた。

簡報によれば、前輪金具は、左右幅46.6cm、爪先幅41.7cm、全高29.6cm、覆輪前後幅1.1cm、深さ0.8cm、木製鞍橋の左右幅45cm、爪先幅31.8cm、全高28.7cmの大きさ、後輪は、左右幅60.5cm、爪先幅58.3cm、全高33cm、木製鞍橋の左右幅59cm、爪先幅54cm、全高32.5cmの大きさである。前輪の覆輪には9箇所、後輪の覆輪には3箇所の「刀傷」がある。

磯金具はその平面形が、下端の爪先を短くカットした五角形をしている。前輪では左右1個ずつ、後輪では左右2個ずつ、周囲に円形の無紋部分をともなった、しおで孔がある。ただし、そこに装着されたであろう、しおで金具や座金具は報告されていない。しおで孔の外側下方には、前輪・後輪とも周囲を毛彫線で囲まれた長方形の孔がある。紋様とは関係ないので、なんらかの機能を付与された装置であろう。磯金具は、外周に沿って鳳凰紋を並べ、その内側に六角形などに区画された龍紋や鳳凰紋を配置する。

海金具と磯金具の紋様は、基本的には、六角形を基本とした紋様単位を組み合わせ、その中に、龍や鳳凰、怪獣、鹿などを表現する。紋様については、他の資料と対比させながら、後述することとし、ここでは、海金具と磯金具の鞍への取付手法について少し述べておく。

公表された実測図や写真では、鞍金具同士が本来あるべきように、互いに重複して示されているので、そこに隠れた釘孔などのあり方を記録しておきたい。

海金具を鞍橋木部に固定するには、小さな銅釘を使用している。海金具の外周にはまばらな釘孔があいており、それに対応する釘の痕跡が鞍橋にも残っている。海金具および鞍橋木部の内周には、多数の孔があるが、それらは内外2重に並ぶ。そのうち外側(透彫紋様に近接する位置)に並ぶ孔は小さく、海金具を固定するための釘孔と判断してよからう。

前輪・後輪とも磯金具には、周囲に2個一対の小さな孔が並んでおり、簡報ではこれを「針穴」と呼んでいるが、金具周囲に覆輪(皮革など有機質素材)を綴じ付けた孔とみてよからう。磯金具の上辺にはそれよりやや内側に、小さい頭部を鍍金した釘が約2.5cm間隔で並ぶ。海金具の内周には、これら磯金具外周の釘に対応する釘孔が並んでおり、鞍橋木部の内周に

も同じように釘孔列を確認できる。これらは、磯金具に打ち込まれ海金具を貫通していて鞍橋に打ち込まれた釘の孔であろう。

これらから、この鞍金具の各部品の取付手法は、次のように復元できよう。まず、木の鞍（鞍橋と居木を組立、紐で緊縛）の鞍橋に海金具を釘留めする。その周囲に覆輪をはめ込んで両端を釘留めし、さらに磯金具を留める。磯金具は、その外周を海金具の内周に重ね、2枚の金具を貫通するように釘を打ち込んで固定する。

**金銅製素紋鞍金具(鞍B)** この鞍金具は、覆輪と海金具だけで磯金具をともなっていない。

前輪金具は、最大左右幅49.8cm、爪先幅44cm、全高32.5cmの大きさである。前輪金具内部には、鞍橋木部が完全に近い状態で残っていて、その大きさは、左右幅49cm、爪先幅42.6cm、全高32cm、内周の高さ23cm、と報告されている。

前輪金具は、厚さ1mm前後の銅板を切り抜いて表面のみ鍍金したもので、内周に沿って打ち込まれた計7本の銅釘（頭部鍍金か）によって鞍橋に固定されていた。覆輪は、厚さ0.7mmの銅板を加工したもので、左右両端には鞍橋の外周に打ち込んだ銅釘がある。10箇所「刀傷」がある。後輪の金具もほぼ同巧である。

前輪の内部に残っていた木製鞍橋は、左右2枚に分かれる。中央での上下幅は10cmあった。板は内周側が分厚くて厚さ1.5cmあり、爪先でわずかに薄くなって厚さ1.2cmとなる。覆輪がはまる外周は、厚さ0.5cmほどである。左右の鞍橋は各々L字形の板で、木理痕跡が外周と並行するように走るのが観察できる。中央部で端に向かって薄くなるよう削り、そこで重ねて貼り合わせている。2枚が重なる鞍橋のほぼ中央あたりに銅錆が付着し、鞍橋の表面、海金具との間には、細かい布と皮革の痕跡が残っていた。鞍橋を貼り合わせた接着剤は不明だが、銅鋳で固定し、全体を布と皮革で梱包していたのであろう。

鞍橋の内周には、海金具の内周にあった銅釘と対応する釘の軸部が刺さっている。そして、鞍橋内周から1.2cmほどのところには、この銅釘をさけるように、左右3個ずつ計6個の円孔があく。孔は各々8.4～9cm離れ、その直径は6mm前後である。鞍橋と居木を緊縛する紐孔と推定できる。

##### 5. 北票県西溝村採集金銅製鞍金具(銅鑿金鏤孔鞍橋包片)

##### 6. 北票県喇嘛洞採集金銅製鞍金具(銅鑿金鏤孔鞍橋包片・銅鑿金鏤孔翼形片)

両者の海金具は、近似した上下幅で、中央の下辺(内周)にはほぼ同規格の低い突出部を備え、透彫紋様もたいへんよく似ている<sup>10</sup>。

西溝村採集鞍金具(1973年9月出土)は、上辺が緩く湾曲したコ字形の海金具である。厚さ0.8cmの銅板に紋様を透彫する。紋様は六角形を主とした多角形の外郭線に囲まれた単位紋様を組み合わせたもので、中央に家形(四辺形の上左右を斜めにした六角形)をした中心単位紋様をおいて、それから左右対称に紋様を配置している。海金具中央下辺には、左右幅16cm

で高さ1cmの突出部をもうけ、そこには龍紋と忍冬唐草紋が表現される。

この海金具は、外周に段差を作って薄くしているのが特徴的である。突出部を挟んだ内周部分には、多数の釘孔があいている。突出部の左側には、径4mmの円孔が5個並んでおり、右側にも同じような孔が並ぶのが観察できる。海金具の左側、屈折して爪先に向かう縦長の部分の内周には、それらよりも小さな孔が7個並ぶ。うち1個は釘の軸が抜け、孔の平面形が四角形である。釘軸部の断面形を反映したものであろう。これらの孔は、海金具および磯金具の固定に関わると推測される。

この鞍金具にともなう磯金具は報告にないが、居木に取り付けた金銅製翼形金具(銅鑿金翼形片)がある。側面に忍冬紋を透彫した金銅製半球形金具(銅鑿金鏤孔半球形飾、2点)は、しおで座金具の可能性が高い。鏡板などについては後にとりあげる。

次に、1970年代に北票県喇嘛洞でも採集された鞍金具について述べる。

喇嘛洞採集鞍金具には、海金具1点と磯金具2点がある。いずれも金銅製である。海金具は右側に欠損部があるものの、左半分は爪先まで完存する。外周は、覆輪をはめ込むために、表側に段差を付けて薄くなっている。復元左右幅60cm、復元全高は24cmである。紋様は、西溝村採集海金具と酷似する。細部の紋様表出手法まで一々に比較するほどには観察していないが、同じ文様型を使った可能性がある。西溝村例と比較すると、喇嘛洞例のほうが規格が小さいので、西溝村例が後輪の海金具、喇嘛洞例が前輪の海金具であろう。

磯金具は、しおで孔が2個あいた横長扇形(翼形)透彫金具が2点ある。1点は下半分ほどの破片。2点とも、周囲に覆輪を威す孔が並ぶことや六角形の透彫単位紋様を配列することは共通するが、相違点もある。内側下隅の形状が尖るか丸いか、内側(洲浜側)に唐草紋帯をめぐらすか否か、そして、しおで孔の配置および周囲の無紋部分の大きさである。喇嘛洞採集例は2個とも右の磯金具であり、十二台郷磚廠88M1号墓例を参考にすれば、しおで孔が2個あるのは後輪の磯金具である。ならば、2点の磯金具は別個の鞍金具と判断できよう。

西溝村採集例には磯金具はともなわれないが、一緒にみつかった唐草紋を飾る半球形金具(銅鑿金鏤孔半球形飾)は、直径が4.9cmあり、喇嘛洞採集磯金具のしおで孔の周囲にある無紋部分(径5cm)と大きさが一致する。半球形金具は、しおで座金具であろう。

## 7. 朝陽三合成墓出土鞍金具

金銅製の鞍金具が3種類4点あり<sup>11</sup>、一つは、幅1cm、厚さ0.1cmの細い板状をした金銅製縁金具(銅鑿金包片圧条)。3.5～4cm間隔で釘孔があく。

二つめは、金銅製覆輪(銅鑿金槽状鞍橋包片)。左右幅47.8cm、爪先幅43cm、全高28cm、前後幅(内周厚み)1.5cm。両端に釘を打ち込んでいるかどうか確認していない。略報には、釘の記述はない。

三つめは、金銅製毛彫海金具(銅鑿金鏤刻鞍橋包片)。左側の爪先部分と右側部分の破片2

点がある。扁平な銅板(一部、裏面を浅く削り込む)に毛彫で紋様を描く。右側部分の破片では、上下にやや扁平な六角形を連結して単位紋様を区切り、龍、飛鳥、兔、鹿、騎馬狩獵人物などを表現する。左の爪先の破片には、龍と飛鳥がみえる。海金具の外周は、外傾する狭い面をなしている。内周・外周とも釘孔は一つもない。

2点の海金具は、下端の龍紋をいれた区画の長さに長短があり、また、六角形の交点部分に円紋を置くか置かないかの違いがある。三合成墓の覆輪はその大きさからみて前輪と推定できる。これと、右側の海金具を組み合わせると、海金具のタテが長く爪先がはみ出すので、右の海金具は後輪のものである可能性が高い。そして、左爪先の海金具は前輪の一部と推測する。紋様の違いもそれに起因するのであろう。

縁金具を一部改変して前輪を推定復元してみると、十二台郷磚廠88M1号墓の素紋鞍金具に近似した姿となる。海金具に釘孔がないのは、外周を覆輪で押さえ、内周を縁金具で押さえるからであろう。また、縁金具の形状からすれば、海金具内周の中央には、突出部はないとみてよい。

## B 轡

轡については、鏡板の型式ごとに記述する。金銅製楕円形龍紋透かし鏡板付轡には、単龍紋をあらわした西溝村採集例と、双龍紋をあらわした喇嘛洞ⅡM16号墓例とがある。

### 1. 西溝村採集例

鉄地金銅製楕円形鏡板付轡である<sup>12</sup>。鏡板はその吊金具とともに一対あるが、銜と引手は残らない。銜は鉄製であろう。報告に「銅鑲金鏤孔鏤」(標本3)とあるが、奇しくも『三燕文物精粹』に片方の鏡板が裏面で撮影され、そこに鉄錆が写っていることにも明らかなように、もとは鉄地板があり、その上に金銅の紋様板と縁金具をのせて鋏留したものである。1枚は紋様が判明する。

鏡板は、左右・上下とも8.3cm。楕円部の上下は6.3cmで、上下2cmある大型の立聞は、上幅5.7cm、下幅4.4cmと基部で大きく幅を狭める。報告に「侈口鼓腹円底罐形」とされた形態は、逆台形をした立聞の形が大きくものをいっている。

鏡板は、鉄地板の上に、毛彫と透彫で龍紋を表現した金銅製紋様板(厚さ2mm)をのせ、さらに輪郭に縁金具(幅4mm、厚さ2.5mm)を重ねた後、5本の円頭銅鋏(頭部鍍金、頭部径3.7~3.9mm・高2mm、軸部径2mm)で鋏留めしてある。もう一枚の鏡板から推定すると、鉄地板の厚さは1mmほどであろうか。

鏡板には、頭部を下に、銜孔を取り巻くように体軀を逆時計回りに丸めた龍紋が、毛彫と透彫で表現されている。

鏡板の中央には、縦2.2cm・横1cmの長方形の銜通し孔があり、また、立聞には、縦

0.8cm・横2.2cmの長方形孔があく。銜通し孔の周囲には鉄錆が付着し、孔の左右には銜留めを固定した直径3mmの円孔がある。また、立聞の孔には皮革質が錆着いて残っている。

鏡板に連結されていた吊金具は、幅1.7cm・長さ約7cm(他方の吊金具は全長7.3cm)あり、2つの五花形紋様が毛彫で表現されている。背面側は欠損。花紋の内部、そして2つの花紋の間にも紋様を入れ、花紋の中央には頭部花形の金銅鉞を打つ。

西溝村墓からは、先に記した鞍金具関係とこの鏡板以外に、金銅製忍冬紋透彫円形飾金具2点(標本4・5)、金銅製龍鳳紋透彫長方形飾金具1点(標本6)、金銅製圭形杏葉(標本7)、金銅製裝飾付鈴(標本8)、銅製馬鐸(標本10)、銅鈴(標本11)が発見された。金銅製圭形杏葉にとまなう吊金具もある。金具は銅板鍍金、鉞は銅製で頭部銀被せである。

これらの馬具類、特に、圭形杏葉、金銅製忍冬紋透彫円形飾金具および金銅製裝飾付鈴は、袁台子壁画墓<sup>13</sup>と共通する。袁台子壁画墓の轡も金銅製楕円形鏡板を備えるが、龍紋はない。

金銅製楕円形鏡板付轡は、三合成墓からも出土した。これらの鏡板は、縦長の楕円形銜通し孔に、短い銜留金具を横方向に渡す特徴が共通し、次に述べる喇嘛洞ⅡM16号墓とは、型式に違いがある。

## 2. 喇嘛洞ⅡM16号墓(図版12-1・2)

鉄地金銅装楕円形鏡板と金銅製引手が各2点ある<sup>14</sup>。鉄製の銜は失われている。

鏡板は、長径(左右)12.2cm×短径(高さ)9.6cmの楕円形をしており、幅(左右)5.0cmで高さ0.8cmの低い立聞がある。銜通し孔(左右幅5.2cm)と立聞孔は、両者一連で鍵穴形をしている。

鏡板の基本的な構造は、鉄地板の上に、薄い双龍紋透彫の紋様板をおき、その上に縁金具をのせて紋様板を挟み込んで固定するものである。なお、地板と紋様板とのあいだには、薄い布が挟み込まれている。銜留金具は四方が鉞留されたX字形金具である。立聞には、幅(左右)5.0cm、高さ6.0cmの吊金具が拵めてある。鏡板と吊金具とも各部品は金銅製だが、鉞頭と縁金具以外は、鍍金層がほとんど残っていない。

鏡板の紋様板には、対向する双龍紋が透彫と毛彫で表現される。頭部には、眼・口・舌や冠毛・顎鬚などの表現があり、四肢も3本爪の脚部で識別できる。体躯の各部には、毛彫の弧線と列点紋が入れている。銜通し孔の周囲は、鋸歯紋と列点紋で縁取られる。この紋様板の裏、鉄地板との間には、織り目の細かい絹布と思しき布が挟み込まれているのが観察できる。みた限りでは平織りのようである。

鏡板周囲には、幅0.7cm、厚さ0.2cmの縁金具がある。縁金具には28個の円頭銅鉞(頭部径0.5cm前後)が並ぶ。頭部の金の残り具合が良好で、縁金具や紋様板とは違って輝きを失わない。これだけが金張りなのであろうか。X字形銜留金具も頭部金張りの銅鉞留めである。頭部径は0.6cmで、縁金具に並ぶ鉞よりやや大きい。銜留金具の銅鉞は、鉄地板裏面まで貫通し、そこで叩き潰された様子が明瞭にみとれる。これに対して、縁金具の鉞は、裏面で銅錆を

確認できるのが1箇所だけしかなく、すべての鉾が鉄地板を貫通していたかどうか疑問である。おそらく、左右と下辺の各1本くらいは貫通して地板との固定の機能を果たすが、他のものは紋様板裏面で叩き潰されているのではなからうか。ただし、肉眼観察ではそれ以上は不明で、X線CTなどの調査が必要である。

吊金具は、二つ折りにした呂字形の金銅板の表側にS字形の龍紋を透彫し、その表側の周囲に回字形の金銅板を重ねた金具である。龍紋の表現は鏡板紋様板とほぼ共通し、回字形金具には毛彫の斜格子紋が刻まれる。吊金具の鍍金は、現状ではほとんど残っていない。吊金具内部には、粗い織りの麻布(?)を芯にして細かな織りの絹布を巻いた布帯が残っている。吊金具各部品同士そして布帯との固定は、金具周囲に打たれた頭部金張りの銅鉾によるが、10本ある銅鉾のうち、裏面に貫通して叩き留められているのは、四隅と上辺の1本の計5本だけである。ほかは、裏側の吊金具内面で止まっている。

引手は、径0.5~0.6cmの銅の円棒をΩ字形に曲げ、叩き潰して平たくした端部に別の短い円棒を渡したものである。短い円棒の一端はあらかじめ笠形に作り、一段段を付けて細くした他端を、端部に通した後、叩き潰して固定されている。引手の表面には鍍金がわずかに残っている。環状の部分には鉄錆が付着する。

### 3. 喇嘛洞 I M10号墓(図版12-4)

鉄製楕円形鏡板付き轡がある<sup>15</sup>。鏡板の大きさは、いずれも推定復元で、長径(左右幅)8.2cm×短径(高さ)6cmである。鏡板の周囲には、縁金具や鉾留はない。鏡板には、長径5cmほどの楕円形の銜通孔があき、そこにX字形銜留が鉄鉾4本で留めてある。立間は幅(左右)4cm、高さ1.7cm以上ある。現状では、バテによって、銜通孔と立間孔とが分離する形に復元されている。

銜は、鉄製二連式で、銜枝は全長8.7cmあり、鉄棒を8回振ってある<sup>16</sup>。外環(銜先の環)は径3.4cmで、径1.8cmの内環(くくみの環)よりかなり大きい。引手は、全長6.2cmしかなく銜枝にくらべて短い。径0.6cmの鉄棒をΩ形に曲げて作られる。

### 4. 喇嘛洞 II M101号墓

喇嘛洞 I M10号墓と類似したX字形銜留をもつ鏡板に、喇嘛洞 II M101号墓例<sup>17</sup>がある。鏡板は立間部を欠損するが、横長の楕円形をした銜通孔と立間孔とが連結した鍵穴形の孔があくことがわかる。このII M101号墓例からすると、I M10号墓例も、銜通孔と立間孔が一連であった可能性が高いのではないか。

### 5. 喇嘛洞 II M202号墓

三葉形をした鑄銅製(鍍金?)鏡板が出土<sup>18</sup>している。幅(左右)9.4cm、全高10.0cmあり、立

間は上端が広く幅5.5cmあり、基部の幅4.5cm、高さ2.8cmである。鏡板(厚さ1.5mm)の周囲には、共造りの突帯(幅0.4cm)がめぐる。鏡板には、頭部径1.1cm、高さ0.75cmの大振りの銚3個が留めてある。鏡板中央には3×1.2cmほどの縦長の銜通孔があり、その両脇には銜留めの鉄錆の跡と鉄銚の軸部が残っている。立聞孔は、左右3.3cm、高さ0.8cmの横に長い孔で、上下辺とも凸字形に屈折している。

同形の鏡板は、朝陽十二台郷磚廠88M1号墓からも出土した。こちらは金銅製だが、鏡板に飾りの銚留はない。また、引手も金銅製で端部には鉄棒を渡していたようである。

#### 6. 倉糧窖鮮卑墓(図版8-4)

鑣、あるいは、はみえだ轡とよばれる、棒状の鏡板をそなえた轡の立聞金具と銜の一部がある<sup>19</sup>。

銅製で円字形をした立聞金具は、左右3.8cm、高さ2.4cmの小さなもので、左右片の下部と下辺中央が丸く抉れている。下辺は厚さ5.3mm、上辺はやや薄く厚さ3.5mmである。左右1.2cm、高さ0.5cmの立聞孔が左右2個あき、その孔の上方には磨耗痕跡がある。金具の下端には、釘先状の突起があり、そこに多孔質の有機物が付着する。肉眼ではその材質を判定できなかったが、木質ではなく鹿などの角かともみえた<sup>20</sup>。

立聞金具には、鉄製の銜枝が付着している。推定長8cmほどで、環の径は約2.5cm。鉄棒を擦った痕跡をとどめる。

この墓からは、ほかに銅製三環鈴1点と半球形金具(鏤花銅泡飾)2点が出土した。後者は、しおでの座金具であろうか。直径4.3cm、高さ0.9cmで、中央に1.2cm角の方孔がある。

### III 三燕地域の鞍金具

観察した資料を中心に、三燕の鞍金具についておおざっぱな分類を試みたいとおもう。しかし、不勉強により編年的な型式組列を復元するまでには至らなかったため、今回は、各々に型式名を付与することはしなかった。

鞍金具は、海金具と磯金具から構成される型式と、磯金具がなく海金具だけの型式とに大別できる。前者の海金具は洲浜部に長方形の突出部があるのに対して、後者にはそれがない、そして、前者は紋様を透彫で表現するのに対し、後者は線彫(毛彫)かまたは無紋(素紋)という違いもある。

海金具と磯金具から構成される型式は、十二台郷磚廠88M1号墓「鞍A」、西溝村採集鞍金具、喇嘛洞村採集鞍金具、喇嘛洞ⅡM101号墓例、喇嘛洞ⅡM266号墓例などがある。いずれも、海金具にも磯金具にも透彫の紋様を表現する。そして、これらは従来もいわれているように、全体の形が矩形に近い十二台郷磚廠88M1号墓「鞍A」、西溝村採集鞍金具、喇嘛洞村

採集鞍金具の一群と、左右に長い楕円形の平面形をした喇嘛洞ⅡM101・ⅡM266号墓例、北票市南八家郷四家板村採集例の一群とに区分できる<sup>21</sup>だろう。

**透彫で鞍橋外形が矩形の鞍金具** 鞍橋の外形が矩形に近い一群は、透彫で紋様を表現する手法が共通する。そして、いずれも金銅製で、金銅板は厚さ2mmほどあって分厚い。これは、後述する楕円形の金銅製鞍金具とは、紋様構成および金具の出来上がりという点でも大きな違いである。そして、海金具・磯金具とも、六角形に龍紋や鳳凰紋のほか動物紋を充填した単位紋様で埋めていく手法は、この様式のどの鞍金具にも共通する。しかし、違いもある。

外形が矩形という、この型式の鞍金具は、まず海金具の縦・横比率で2つに細分できる。それは、十二台郷磚廠88M1号墓(鞍A)と、西溝村採集鞍金具と喇嘛洞村採集鞍金具との区別である。前者は、鞍金具(海金具)が比較的高い。海金具でみると、横寸法／縦寸法=3:2である。これにくらべると、後者は、その比率が2:1であり、みために幅広い、ないしは鞍橋がその幅に対して低い印象を与える。そして、この幅と高さの比率の違いは、磯の形の差に反映されているように思う。

十二台郷磚廠88M1号墓例(鞍A)は、海金具の左右両端(底辺)が覆輪とおおむね直角で、これにあわせて磯金具は五角形である。これに対して、喇嘛洞村採集鞍金具の磯金具は四角形である。海金具の両端(底辺)が覆輪とやや鋭角をなし、磯金具の左右の下隅が尖っている<sup>22</sup>。そして、この西溝村採集鞍金具と喇嘛洞村採集鞍金具は、海金具の紋様がきわめてよく似ている。実物での対比をおこなってはいないが、同じ手本(様=ためし)を使った可能性を想定してよいのではなかろうか。これらに対して、十二台郷磚廠88M1号墓(鞍A)の海金具は、紋様の割付や、洲浜部にある突出部の紋様が、西溝村と喇嘛洞村の2例とは違う。

さて、十二台郷磚廠88M1号墓例と喇嘛洞村採集例とも、磯金具の周囲に小さい円孔が並んでいる。十二台郷磚廠88M1号墓例は、2個一対の孔である。釘の孔にしては小さいので、これに革ひもなどを通し覆輪としたようである。

**透彫で鞍橋外形が楕円形の鞍金具** 鞍橋の外形が楕円形に近い鞍金具には、金銅製品の喇嘛洞ⅡM101号墓例、北票採集例と鉄地金張製品の喇嘛洞ⅡM266号墓例がある。

この2例は、喇嘛洞ⅡM266号墓例の紋様が鏽のため十分にわからないという限界はあるが、ほぼ共通した特徴を備える。まず、海金具と磯金具には龍紋が透彫されているが、六角形に区画された単位紋とはなっていない。

また、鞍橋外形が楕円形の鞍金具は、釘を多用する点に特徴がある。まず、覆輪は、鞍橋の外周にはめ込むのではなく、帯状の金具を多数の釘を使って鞍橋の外周に留め付ける点に特徴がある。金銅製のⅡM101号墓例は円頭釘、鉄地金張製のⅡM266号墓例は方頭釘が使われている。

海金具と磯金具も同形の釘で鞍に固定される。ⅡM101号墓例は、海金具と磯金具の外周に、覆輪と同じような縁金具をおき、その上から釘を打つ。釘は円頭釘である。これとは別

に、海金具の内周には、まばらに釘留めした痕跡があるが、釘の形状は不明。その上に磯金具の外周が重なるので、大きな円頭釘でなかったことは疑いない。Ⅱ M266号墓例も海金具・磯金具の外周に方頭釘を打ち並べるが、こちらは縁金具を使わず、直接、打ち込まれていた。

金銅製のⅡ M101号墓例の磯金具に並ぶ釘は、すべてが木製の鞍に打たれたのではない。この点は、覆輪や海金具に並ぶ釘とは違っている。個別解説で詳述したように、磯金具の一部の釘は金具の裏面で折り曲げられており、それらは木製の居木先を覆う皮革を固定するためのものである。鞍橋の表面にも皮革が張られていたかどうかは観察できなかったが、木製の鞍に革を張る例があることは既に報告されている。

報告された例は、朝陽市南郊12km、大凌河を隔てた袁台子村の「東晋壁画墓」からみつかった鞍である<sup>23</sup>。この鞍は、墓室脇の耳室<sup>24</sup>に置かれていた。木部全体を漆塗りの皮革で覆い、鞍橋には彩画があった<sup>25</sup>。図(報告35頁図29-2)をみると、鞍は両端が三角形に尖り、磯部(居木先)も下端が鋭角に尖っているようである。後輪の外周(覆輪)に打たれた9本の銅釘は、配置が不規則だが、これは脱落したものがあつたためとみるべきだろう。推定復元すれば、本来は全部で19~20本並んでいたであろう。

喇嘛洞Ⅱ M101号墓例も、袁台子例のように表面に皮革を貼った木製鞍だったことは容易に想像できる。磯金具が、皮革と金具を別々に固定するのではなく、金具と皮革をあらかじめ連結・固定しておき、それを両者一緒に釘で固定する手法がとられたのは、金具が装飾だけを目的とせず、革留めの機能を併せもっていたためであろう。

**鞍橋外形が矩形で磯金具のない鞍金具** 海金具だけの鞍金具には、部品の数異なる2種類がある。

一つは、覆輪および海金具に加えて、海金具の内周に重ねる細い縁金具をとまなうもので、三合成墓例がそれである<sup>26</sup>。金具はいずれも金銅製。海金具の内周の縁金具は釘留めされている。海金具には釘孔がみあたらないので、覆輪とこの縁金具で鞍橋に固定されたと推定できる。海金具には毛彫の紋様がある。

もう一つは、覆輪と海金具だけから構成された鞍金具である。金銅製品と鉄製品がある。朝陽十二台郷磚廠88M1号墓例と房身村北溝墓地M8号墓例<sup>27</sup>とが金銅製、喇嘛洞Ⅱ M202号墓例が鉄製である。

喇嘛洞Ⅱ M202号墓例の後輪金具に2個一対のコ字形金具が打ち込まれている点を除けば、これらの鞍金具は、形がよく似ている。さらに、断面U字形の覆輪を鞍橋にはめること(Ⅱ M202号墓例後輪のみ左右2本の構成)や、海金具の内周を釘留めする特徴も共通する。

以上、遼寧地域の鞍金具を、大きくは3型式に、「透彫で鞍橋外形が矩形の鞍金具」は、磯金具の形態に2種があり、「鞍橋外形が矩形で磯金具のない鞍金具」も内周の縁金具の有無や海金具の紋様の有無で2種に細分できることをしめした。

これらの鞍金具3型式5種がどのような型式組列を構成するのか、断案はまだない。

報告文をみると、十二台郷磚廠88M1号墓、三合成墓は「前燕墓」とされており、倉糧窖鮮卑墓は「前燕初期ないし早期」という。暦年代を示した例に、「4世紀初頭」の房身村北溝M8号墓や「4世紀初頭から中頃」の袁台子壁画墓がある。後者の年代の基礎となったのは、安陽孝民屯墓<sup>28</sup>である。後燕の崔暹墓(建興十年・西暦395年)や、北燕の馮素弗墓(太平七年・西暦415年)のように、それ自体が紀年を残す墓で前燕の時代に属すものは未発見である。

では、副葬品の類似によって編年できないであろうか。袁台子壁画墓から出土した金銅製円形透彫飾金具は、西溝村墓例と類似する。さらに袁台子壁画墓から出土した金銅製杏葉は、西溝村墓のほか十二台郷磚廠88M1号墓とほとんど近似する。西溝村墓と袁台子壁画墓とはその他にも、笠形飾付鈴の形がよく似るなど、馬具の部品において類似性が高い。ただし、轡の鏡板はともに楕円形ではあるものの透彫龍紋の有無や立聞の形状などに違いはある。

袁台子壁画墓から出土したその他の遺物で、類似した資料がみいだせるのは青銅製鏃斗である。これは、倉糧窖鮮卑墓と類似する。ただし、獸蹄形の脚や曲柄の形状には多少の違いがあり、倉糧窖鮮卑墓のほうが硬直した印象を受ける。袁台子壁画墓と倉糧窖鮮卑墓との轡の形態には、相当の懸隔があって単純に比較できない。

また、倉糧窖鮮卑墓から出土した金銅製半球形透彫金具がしおで金具ならば、西溝村墓に類品がある。十二台郷磚廠88M1号墓の磯金具も同様の金具がともなうことはすでに述べた。

このように、北票倉糧窖鮮卑墓、袁台子壁画墓、西溝村墓そして朝陽十二台郷磚廠88M1号墓には、共通する馬具や金属器をみいだすことができる。その一方で、轡や鞍金具の型式差もまた存在する。これが時期差なのか地域差の反映なのかは、今後、検討の必要がある。

なお、袁台子壁画墓は尻繫の構成が安陽孝民屯墓に似るとされ、鐙の単複が年代決定の根拠にあげられるが、もう少し慎重な比較検討がなされるべきであろう。

## 註

- 1 桃崎祐輔 2005「東アジア騎馬文化の系譜—五胡十六国・半島・列島をつなぐ馬具系譜論をめざして—」『馬具研究のまなざし—研究史と方法論—』古代武器研究会・鉄器文化研究会連合研究集会、pp.91-127
- 2 遼寧省文物考古研究所・朝陽市博物館・北票市文物管理所 2004「遼寧北票喇嘛洞墓地1998年発掘報告」『考古学報』2004年第2期、考古雑誌社、p.228
- 3 「左」「右」は、鞍金具に向かつての左右である。
- 4 同じような状況は、後述する朝陽十二台郷磚廠88M1号墓の鞍金具にも認められた。
- 5 現状では左側に覆輪の欠損があり、60本まで数えることができる。25本残存しているが、他は脱落ないし頭部が欠損している。
- 6 出土直後には右磯金具に8本あった(遼寧省文物考古研究所 2002『三燕文物精粹』遼寧人民出版社)

- 社、p.50)。
- 7 遼寧省文物考古研究所・朝陽市博物館・北票市文物管理所 2004「遼寧北票喇嘛洞墓地1998年発掘報告」(註2前掲書)。遼寧省文物考古研究所 2002『三燕文物精粹』(註6前掲書)p.94
  - 8 遼寧省文物考古研究所・朝陽市博物館・北票市文物管理所 2004「遼寧北票喇嘛洞墓地1998年発掘報告」(註2前掲書)、p.220
  - 9 遼寧省文物考古研究所・朝陽市博物館 1997「朝陽十二台郷磚廠88M1発掘簡報」『文物』1997年第11期、文物出版社、p.19-23
  - 10 田立坤・李智 1994「朝陽発現的三燕文化遺物及相關問題」『文物』1994年第11期、文物出版社、pp.20-32
  - 11 于俊玉 1997「朝陽三合成出土の前燕文物」『文物』1997年第11期、文物出版社、pp.42-48
  - 12 田立坤・李智 1994「朝陽発現的三燕文化遺物及相關問題」(註10前掲書)
  - 13 遼寧省博物館文物隊・朝陽地区博物館文物隊・朝陽県文化館 1984「朝陽袁台子東晋壁画墓」『文物』1984年第6期、文物出版社、pp.29-45
  - 14 遼寧省文物考古研究所 2002『三燕文物精粹』(註6前掲書)p.57
  - 15 遼寧省文物考古研究所 2002『三燕文物精粹』(註6前掲書)p.98
  - 16 銜枝の「捩り」については、2条を捩りあわせたとみえたが、確定的でない。
  - 17 遼寧省文物考古研究所・朝陽市博物館・北票市文物管理所 2004「遼寧北票喇嘛洞墓地1998年発掘報告」(註2前掲書)、p.220
  - 18 遼寧省文物考古研究所・朝陽市博物館・北票市文物管理所 2004「遼寧北票喇嘛洞墓地1998年発掘報告」(註2前掲書)、p.229
  - 19 孫国平・李智 1994「遼寧北票倉糧窖鮮卑墓」『文物』1994年11期、文物出版社、pp.38-42
  - 20 2005年11月30日、姫路市埋蔵文化財センターで宮山古墳第2主体から出土した、鉄製鑣轡の復元品(元興寺文化財研究所・塚本敏夫氏復元製作)をみる事ができた。そこには、鹿角が銜先にはめ込んであり、北票文物管理所での観察結果が思い起こされた。当日、ご案内いただいた同センター大谷輝彦氏に感謝します。
  - 21 前者は、陳山氏の分類(陳山 2003「北票新発現的三燕馬具研究」『文物』2003年第3期、文物出版社、pp.63-71)による「斜収式拱形高鞍橋(第一類)」の一部、内山氏の分類(内山敏行 2005「中八幡古墳出土馬具をめぐる諸問題」『中八幡古墳資料調査報告書』池田町教委、pp.63-76)による「角形の系列」であり、後者は、それぞれ「近楯円式拱形高鞍橋(第二類)」、「丸みをもつ系列(近楯円式)」に相当する。
  - 22 喇嘛洞村採集の磯金具は、報告(田立坤・李智「朝陽発現的三燕文化遺物及相關問題」(註10前掲書))に「標本34」として図(p.27図22)と原色写真が掲載されているが、それぞれ別の破片である。形やしおで孔の配置に違いがあり、両方が海金具と組むのか、どちらか片方なのか不明である。
  - 23 遼寧省博物館文物隊・朝陽地区博物館文物隊・朝陽県文化館「朝陽袁台子東晋壁画墓」(註13前掲書)。馬具の記述はpp.37-38
  - 24 墓室は南南西に向き、耳室はその東側にある。
  - 25 鞍橋が2枚ある。前輪の鞍橋と後輪の鞍橋である。鞍橋と居木(鞍架)は木芯で革張(包皮革)である。

居木は既に腐朽している。前輪の鞍橋(前橋)は平面形が矩形(拱形)で、中央が広く、両端は細く尖っている。鞍橋木部はすでに腐朽しているが、皮革は残る。皮革の表面には褐色の漆が塗られ、そこに朱で描かれた雲紋の図像がある。鞍橋の内縁には、(左右)対称に斜めの鞍の面がある。居木先に当てた皮革である。前輪は高さ30cm、左右幅(広)46cm、鞍橋の高さ10cm。

後輪は前輪と同じ外形である。鞍橋の内周と外周(内外縁)には、突出した稜線(凸稜)があり、外周のそれには、長さ2cmの銅釘が9本残っていた。これらは、鞍橋を覆う皮革に打たれた釘であろう。後輪の内縁にも居木先の皮革がある。後輪の高さ33.5cm、左右幅60cm。

- 26 喇嘛洞 I M17号墓からも、縁金具が出土しているが、全体の構成は不明である。
- 27 徐基 1990「関于鮮卑慕容部遺跡的初步考察」『中国考古学会第六次年会論文集』文物出版社、pp.160-173。陳山 2003「北票新發現的三燕馬具研究」(註21前掲書)
- 28 中国社会科学院考古研究所安陽工作隊 1983「安陽孝民屯晋墓發掘報告」『考古』1983年第6期、科学出版社、pp.501-511